九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

対外戦争と「女性性」 : 『ヘンリー5世』の場合

高森, 暁子
九州大学大学院文学研究科 : 修士課程

https://doi.org/10.15017/6788276

出版情報：九大英文学. 40, pp.19-34, 1997. The Society of English Literature and Linguistics, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

対外戦争と「女性性」－『ヘンリー５世』の場合

高　森　暁　子

アジンコートの戦場でのヘンリー率いるイギリス軍の大勝利は、しばしばヘンリーのフランス併合とイギリス王としての権威確立を実現した直接の原因であるかのように記憶されている。しかし戦場における個人的な功績はヘンリーを偉大な征服者として位置づけるに過ぎず、彼が自らの要求どおりフランスの正式な王位継承者となるためには、フランス王女キャサリンとの結婚が不可欠な条件であった。彼女との結婚によって「イギリス王でありフランスの王位継承者」と承認されることで、ヘンリーは王位簒奪者であった父からは完全に受け継ぐことのできなかった、イギリス国王としての正統性をも獲得したと言える。また劇中で明白に語られることはないものの、ヘンリーのフランス王位請求の根拠自体が彼の女系の血縁に基づくものである。このようにイギリス、フランスの両国を支配するヘンリーの権威は、外国人であり女性である人物と彼自身との血縁や婚姻関係に依存するところが大きい。にもかかわらず実際に劇中で起こるのは、そういった事実を隠蔽せんとするかのような、武勇の誉れ高いヘンリーの男系の先祖への度重なる言及や、軍事的英雄としての彼の男性性の誇示といった逆説的な現象である。『ヘンリー５世』においてはヘンリー自身だけでなくイギリス軍やイギリスの存在そのものが男性的なものとして表象され、敵であるフランス軍や、近く併合される運命にあるフランスの国土は女性化されて現れる。こうした両国のアイデンティティの恣意的なジェンダー化は、相手の「女性性」を様々な形で動員することにより、常にヘンリーとイギリスの「男性性」を演出する役割を果たしている。以下の小論では、ヘンリーの戦争においてこのように重要な意味を持ち、かつその性質を状況に応じて変化させる「女性性」について検討してみたい。

I

劇の冒頭、カンタベリー大司教がヘンリーのフランス王位請求に関わるサリカ法について滔々と弁ずるくだりがある。サリカ法は女子の王位継承を禁じるもので、それが現在のフランスに適用されるとの解釈のもとに、女系によるヘンリーの王位請求を拒もうとするフランス側の主張の是非が問われる。この箇所については従来批評家たちによって様々な解釈が与えられてきたが、それらは概ね、さしたる重要性を持たない法律談義に過ぎないとして等閑視するか、あるいはそこに、戦争の動機を正当化しようとするヘンリーと教会財産の確保を目論むカンタベリーとの共謀関係を読み取るか、そのいずれかに終始してきたように思われる。しかし近年、サリカ法とヘンリーの系図に基づく王位請求との関連について説くカンタベリーの言葉の中に、『ヘンリー5世』という劇全体に関わる新たな問題設定の可能性を見る解釈が、フェミニズム/ジェンダー批評によって提示されてきた。[1] ヘンリーの要求は女系の血統に基づくものにもかかわらず、彼の系図は男性のみによって語られ、彼自身の女系の先祖に関する言及は奇妙なまでに少ない－これらの批評はこの点に注目し、議論の出発点とする。それらと問題意識を共有する本論もまた、出発点を同じくするところから始めてみたい。

家父長制社会を支える父系制の原理は、実際にその肉体を通じて、父から息子への血統と権利の継承を行う母の存在なしには成り立たない。「父の似姿」の再生産の場から母の影響を排除する望みはかなわず、女性は男性による「純粋な」血の系譜の構築に寄与すると同時に、自らの存在によってそれが虚構に過ぎぬ所以をも明かしてしまう。一族の権利の継承と血統の正しさの保証を女性に求めなければならない父系制の構造そのものが、女性に対する男性の不安の淵源となる。女性への必然的な依存によって生じる不安と、それを払拭するかのような女性の存在意義の抑圧、「純粋な」男性性への希求－これこそが冒頭のカンタベリーの演説の中に、さらには劇全体にわたってヘンリーを男性的君主の鑑として演出する言葉の中に、存在しているものではないだろうか。

王の面前でサリカ法の議論を展開するのに先立って、ヘンリーのフランス王位請求について述べるカンタベリーの言葉は重要である。彼はそれを“the crown and seat of France, / Derived from Edward, his great-grandfather”（1.1.88-9）[2]と呼び、ヘンリーの要求するフランス王位は彼の曾祖父であるエドワード３世に由来すると明言している。ところが実際にはエドワード３世のフランス王位に対する権限は、フランス王女であった母イザベラに由来するものであった。よってヘンリー自身の要求もまた、エドワードではなくイザベラに基づくと言わねばならない。しかし王位請求が外国人であり女性であるイザベラによるものだという事実は、イギリス王家にとって要求を正当化するために知る必要はあっても、一族の歴史として記憶する必要はなく、ましてそれを公表することは極力避けるべき事態である。カンタベリーによってその事実は最小限にしか触れられず、イザベラという彼女の名やヘンリーとの関係といったものは、少なくとも言葉の上で明らかにされることはない。ヘンリーの領土拡大への野望を唯一正当化できる彼女の存在は、その意義の大きさゆえにイギリスの男たちにとって口にすることのできないものとなった。イザベラはただ“the female”（1.2.92）という一つのカテゴリーに還元されることによってしか、その存在をカンタベリーの言葉の中に現すことはない。

So that, as clear as is the summer's sun,
King Pepin's title, and Hugh Capet's claim,
King Louis his satisfaction, all appear
To hold in right and title of the female.
So do the kings of France unto this day,
Howbeit they would hold up this Salic law
To bar your highness claiming from the female,
And rather choose to hide them in a net
Than amply to embare their crooked titles
Usurped from you and your progenitors.　　(1.2.86-95)

フランスの歴代の王たちが女系による王位継承を繰り返してきた経緯を語ることで、カンタベリーはあたかも女系に基づく継承は、イギリスではなくフランスに関わる事象であるかのような錯覚を与えている[3]。さらに彼が至った結論は、ヘンリーの王位請求の正当性の保証というよりはむしろ、自らは女系相続を行いながらもヘンリーの要求を阻もうとするフランス側の不当性の告発である。現在のフランス王権はヘンリーとその祖先から「簒奪された、歪んだ権利」（1.2.94-5）として示され、その奪回は自らとかつてフランスを慴服させた偉大な先祖との名誉回復のために、ヘンリーに課された使命となって立ち上がる。

CANTERBURY
Go, my dread lord, to your great-grandsire's tomb,
From whom you claim; invoke his warlike spirit,
And your great-uncle's, Edward the Black Prince,
Who on the French ground played a tragedy,
Making his most mighty father on a hill
Stood smiling to behold his lion's whelp
Forage in blood of French nobility....
ELY
Awake remembrance of these valiant dead,
And with your puissant arm renew their feats.
You are their heir, you sit upon their throne,
The blood and courage that renowned them
Runs in your veins, and my thrice-puissant liege
Is in the very May-morn of his youth,
Ripe for exploits and mighty enterprises. (1.2.103-21)

ヘンリーのフランス進攻はここにきてその性格を急激に変え始める。女系による王位請求という本来の意義は宙づりにされ、今回の戦争は、かつてエドワード3世が築いたイギリスの栄光の復活をかけた "mighty enterprises" (1.

2.121）へと変容する。カンタベリーの口からエドワード３世と息子のエドワード黒太子がフランスの戦場で収めた勝利の様子が再現され、さらにイーリーはそれら「武勇の死者たちの記憶を蘇らせる」(1.2.115)とともに、軍を率いて「彼らの偉業を再興する」(1.2.16）ことこそヘンリーの使命であると断言する。ヘンリーと名高い男系の先祖たちとの血の連続性が強調され、あたかもヘンリーが彼らの武勇伝を引き継ぐ宿命に生まれついた、選ばれた男子であるかのように響く。ヘンリーが「エドワード３世の直系」であることは劇中でイギリス、フランスの双方によって幾度も言及され、それが彼自身の男性性とともにイギリスの軍事的優越を保証するものとして理解される。ヘンリーの名に重ね合わされたエドワード３世の記憶は、フランスにとって過去の「あまりに忘れがたい恥辱(too much memorable shame)（2.4.53)」を思い起こさせるものであり、蘇った脅威となってフランス王を悩ませる。

FRENCH KING　Think we King Harry strong;
And, princes, look you strongly arm to meet him.
The kindred of him hath been fleshed upon us,
And he is bred out of that bloody strain
That haunted us in our familiar paths.　(2.4.48-52)

過去から蘇り、現在を支配する過去の記憶。エドワード３世、エドワード黒太子という過去は鮮やかに現在に蘇り、彼らの記憶がヘンリーとイギリスを未来へと導く。一方現在に大きな意味を持ちながら、決して語られることのない記憶がある。イザベラという名の過去は、その名を記した紙の中から蘇ることはない。

II

対外戦争においては、敵である外部と自らの属する内部との間に決定的な差異を構築することが重要になる。『ヘンリー５世』においても「男性的なイギリス、女性的なフランス」という国家のアイデンティティのステレオタイ

プ化は顕著な形で現われている。戦争中の国家のアイデンティティは通常その国の男性、それも実際に戦場に姿を現わす兵士のそれを意味するため[4]、ヘンリー率いるイギリス軍の男性性（masculinity）と、皇太子率いるフランス軍[5]の男性性の欠如（effeminacy）が、それぞれ両国の性質を象徴するものとして示される。質実なイギリス軍に対し、戦場に美々しい軍服姿で登場するフランス軍は、華やかな貴族文化と軍事的無能という当時のフランスに対するステレオタイプの一つを体現して描かれている[6]。とりわけフランス軍の中心的存在として、またフランス王位の継承をめぐるライバルとしてヘンリーと対置される皇太子は、現実認識を欠いた過剰な自信と、馬を恋人としてソネットを捧げるような時代錯誤の騎士道精神に貫かれた人物として登場する。高言を吐くことと馬を自慢することによってしか表すことのできない皇太子の男性性は、それ自体が言わば男性性のパロディーであり、彼が内容を伴わぬ自らの男性性を強調すればするほど、それは彼の“effeminacy”の証明となる。

初期近代のイギリスにおいて“effeminate”は、はっきりと男性的ではないもの、あるいは男性としてふさわしい完全さから逸脱した状態を広く表す概念であった[7]。すなわちそれは特定の男性だけにあてはまる性質ではなく、いかなる男性も陥る可能性のある危険な状態を示していた。例えばジュリエットを愛しすぎたために自らの男性的な性質が損なわれてしまったと嘆くロミオは、“O sweet Juliet, / Thy beauty hath made me effeminate, / And in my temper softened valor's steel !”（3.1.115-7）[8]と呟き、『リチャード2世』の中で放蕩息子の行く末を案じるボリングブルックは、ハルを“he, young wanton, and effeminate boy”（5.3.10）[9]と呼ぶ。そしてこのボリングブルックの言葉から明らかになるのは、ヘンリーのハル時代の放埒にも、望ましい男性的要素の欠如を示す“effeminate”の形容がふさわしいということである。事実エドワード3世の記憶のもとに「男性的なイギリス」を体現しようとしていたヘンリーを挑発し、戦争の引き金を作ったのは、皇太子によるヘンリーの“effeminacy”への攻撃であった[10]。皇太子は使節を通じて次のように述べ、ヘンリーのフランス王位請求を退ける。

you savour too much of your youth
And bids you be advised. There's naught in France
That can be with a nimble galliard won;
You cannot revel into dukedoms there. (1.2.251-4)

皇太子はヘンリーの男性性の欠如はフランス進攻はおろか自国の統治にさえ適さず、彼が王位にあることはイギリスの軍事的弱体を証明するものと解し、さらにこう言い放つ。

she is so idly kinged,
Her sceptre so fantastically borne
By a vain, giddy, shallow, humorous youth,
That fear attends her not. (2.4.26-9)

イギリスの貴族とフランス王にとっては、蘇ったエドワード３世の記憶がヘンリーの男性性とイギリスの軍事能力を証明するものであった。それに対し皇太子には、既に葬られた放埒時代の記憶が、ヘンリーの男性性の欠如とイギリスの軍事的弱体の証明として映る。しかしこのヘンリーへの嘲弄によって明らかになるのは、時節の変化を読めずに現実認識を誤る皇太子の愚かさだけであり、これによってヘンリーの男性性が脅かされることはない。むしろこの皇太子の発言に関して注目すべきなのは、国土が女性にたとえられ、それを統治するのは男性的な行為だと理解されている点である。自分の国にせよ相手の国にせよ、国土を女性に見立てることはイギリス、フランス双方によって行われる。例えばカンタベリー大司教は兵士たちが外征に赴いた後のイギリスを「嘆き悲しむ未亡人（mourning widow）」にたとえ（1.2.158）、戦争後の交渉の場ではヘンリーとフランス王がフランスの都市を「乙女（maid）」という言葉で表現する（5.2.313-23）。「未亡人」も「乙女」もともに、その保護と管理を行う者の必要性を語の背後に併存させている。そして皇太子の批判を根拠づけているのは、それを行うに足る十分な男性性を備えている者が国土の正統な所有者であるとの認識である。イギリス軍の進

攻を許したことを口惜しがるフランス貴族たちの言葉は、その認識をさらに裏付けるものである。

CONSTABLE

O, for honour of our land,
Let us not hang like roping icicles
Upon our horses' thatch, whiles a more frosty people
Sweat drops of gallant youth in our rich fields!
Poor we may call them in their native lords.

DAUPHIN

By faith and honour,
Our madams mock us and plainly say
Our mettle is bred out, and they will give
Their bodies to the lust of English youth,
To new-store France with bastard warriors. (3.5.22-31)

軍司令官は国土の "native lords" である自分たちが男性性を行使しないでいることを恥じ、皇太子は男性性を喪失した自分たちが国の女性のセクシュアリティを管理できなくなるばかりか、国土に自らの子孫を残す権利を失うことによって、ついには国土の所有者でさえもなくなる恐怖を明らかにしている。

ヘンリーを嘲弄した際の「男性的な者こそ国土の所有者にふさわしい」という論理は、皮肉にもそれ自体が皇太子の王位継承者としての不適格性と、ヘンリーのフランス併合の妥当性を示唆するものであった。そして戦場における奇跡的な大勝利によってヘンリーの男性性は実際に証明され、フランス国土の所有権は戦勝国であるイギリスの手中に収められる。とはいえ男性性の証明と戦勝国の権利が即、フランス王位継承者としての正統性に転化するわけではない。ヘンリーが皇太子に代わる正式な王位継承者としてフランスを支配するためには、またしても王家の系図にその根拠を求めざるをえない。今度は王女キャサリンとの結婚により、ヘンリーはその名をフランス王家の

系図に刻む。すなわちヘンリーのフランス王位請求は、イザベラとの血縁に端を発し、キャサリンとの結婚によって保証されたと言えるのだ。しかしヘンリーにとってのイザベラとキャサリンの存在意義の違いは、キャサリンはヘンリーが戦争によって獲得したものだという点にある。確かにキャサリンはイギリスがフランスに突きつけた“capital demand”（5.2.96）であったし、戦いに勝利した勇者が王女を妻にして平和をもたらすという筋書きは、ヘンリー / イギリスが、キャサリン / フランスを夫として支配するという帰結を「自然な」ものと見せる。戦いの間「女性的なフランス」というアイデンティティを構成していた戦場のフランス男性の“effeminacy”は、戦いの終わりとともに姿を消し[11]、戦後は新たな「女性性」がフランスの象徴として現われる。

III

『ヘンリー５世』の中には、戦闘の行われるその場に存在しながら、戦争中の国家のアイデンティティとして前面に出ることのない別の「女性性」も描かれている。戦場に実在の女性の居場所はなくとも、不可視の女性は男性間の戦いの場に確かに存在している。ここではそれはイギリス軍の攻撃に曝される、ハーフラーの不可視の女性たちである。ハーフラーの城門前で、ヘンリーは市長ならびに市民に向かって門を開けるよう命じる。ヘンリーの恫喝は、イギリス軍が破壊しようとする対象が何であるかを如実に物語っている。

If I begin the battery once again,
I will not leave the half-achieved Harfleur
Till in her ashes she lie buried.
The gates of mercy shall be all shut up,
And the fleshed soldier, rough and hard of heart,
In liberty of bloody hand shall range
With conscience wide as hell, mowing like grass

Your fresh fair virgins and your flowering infants.

. . . . . .

What is't to me, when you yourselves are cause,
If your pure maidens fall into the hand
Of hot and forcing violation? (3.3.7-21)

ハーフラーの町は女性化され、ヘンリーはその門を開かせ、侵入しようとする者として現われる。未だ想像段階にあるイギリス兵による攻撃は、「泣き叫ぶ娘たち」(3.3.35)、「白髭の父親たち」(3.3.36)、「裸の赤子たち」(3.3.38) などの弱者に向けられているが、中でも執拗にその対象とされているのは、"fair virgins" "pure maidens" といった、その処女性によって価値を保証される未婚の女性たちである[12]。彼女たちの処女性への攻撃は、共同体内部の女性のセクシュアリティを管理する側の男性の権利への攻撃を意味している。ヘンリーの脅迫は、実際にはハーフラーの女性ではなく男性に向けられたものであり、ここに女性のセクシュアリティを媒介とした両国の男性間の競合関係が浮き彫りになる[13]。敵の攻撃の対象となる女性性はしかし、女性としての国家のアイデンティティを直接決定する要素ではない。専らそのセクシュアリティによって定義されるハーフラーの女性たちの女性性は、それが (攻撃に曝される可能性を示唆する) 危ういものと表象されることにより、フランス男性の男性性がいかなるものかを逆照射している。女性のセクシュアリティを十分に保護、管理できない男性のアイデンティティこそ、戦場における「女性的なフランス」の正体に他ならない。

戦争後の和平交渉の場面で、フランスの「女性性」の象徴として新たに登場するのは、ヘンリー / イギリス / 男性によって支配、矯正される女性性である。それは具体的には王女キャサリンとフランスの国土の女性性として示される。それらはまずヘンリーによって征服される対象であり、ヘンリーとフランス王の間で進められる交渉の中では、間もなく掌握されるその処女性において両者 (maid, maiden cities) は同義である。

FRENCH KING

the cities turned into a maid; for they are
all girdled with maiden walls that no war hath entered.
KING　Shall Kate be my wife?
FRENCH KING　So please you.
KING　I am content, so the maiden cities you talk of
may wait on her: so the maid that stood in the way
for my wish shall show me the way to my will. (5.2.317-23)

またキャサリンとフランスの国土はその性質において、男性による統制を経て初めて望ましい状態に至る、不完全性を特徴としている。キャサリンに求婚する場面で、ヘンリーは彼女の他者性を積極的に否定する[14]。キャサリンのフランス人としてのアイデンティティは、ヘンリーにとってはイギリス人としての不完全さ以上の価値を持ち得ず、彼の待ち望む彼女の愛の言葉も "broken music" (5.2.240-1) としか響かない。ヘンリーは彼女を「フランスのキャサリン」ではなく「イギリスのケイト」として自分の妻にしようと試みる。彼女を飽くまで「ケイト」と呼ぶことは、『じゃじゃ馬ならし』の中でペトルーキオーがカタリーナを「ケイト」と呼んで求婚しようとする場面を想起させる。

Kath. They call me Katherine that do talk of me.
Pet. You lie, in faith, for you are call' d plain Kate,
And bonny Kate, and sometimes Kate the curst;
But Kate, the prettiest Kate in Christendom,
Kate of Kate Hall, my super-dainty Kate,
For dainties are all Kates, and therefore, Kate,
Take this of me, Kate of my consolation, . . . (2.1.184-90) [15]

ハワードとラッキンは「ケイト」という呼称と "domesticate" (飼いならす / 自国化する) との関連性を指摘する[16]。カタリーナの "domestication" は彼女の我の強さを「飼いならす」行為だが、キャサリンのそれは彼女をヘンリ

ーの妻にふさわしく「飼いならす」とともに、外国人である彼女をイギリスの妻として「自国化する」という二重の意味を帯びている。

フランスの国土もキャサリン同様に、男性による矯正を必要とする女性性をその特徴としている。バーガンディーはフランスを「適切な手入れ（husbandry）を欠いて、自らの豊饒さのゆえにすさんでしまった庭」にたとえる。

all her husbandry doth lie on heaps,
Corrupting in it own fertility.
Her vine, the merry cheerer of the heart,
Unpruned dies; her hedges even-pleached,
Like prisoners wildly overgrown with hair,
Put fourth disordered twigs; her fallow leas
The darnel, hemlock and rank fumitory
Doth root upon, while that the coulter rusts
That should deracinate such savagery.
The even mead, that erst brought sweetly forth
The freckled cowslip, burnet and green clover,
Wanting the scythe, all uncorrected, rank,
Conceives by idleness, and nothing teems
But hateful docks, rough thistles, kecksies, burrs,
Losing both beauty and utility.
And as our vineyards, fallows, meads and hedges,
Defective in their natures, grow to wildness.... (5.2.39-55)

鎌（scythe）や鋤（coulter）による手入れ（husbandry）を欠いた、矯正されない（uncorrected）豊饒さは単にグロテスクなものとされ、男性による管理を受けない女性的なものの放縦は否定される[17]。無秩序な野生（wildness）に成り果てた庭は、再び美観と実用性（beauty and utility）のために「飼いならされる」ことにより、本来の姿を回復する可能性を与えられる。

ヘンリーを夫にすることとイギリスの支配下に入ることは、キャサリンと

フランスの両方にとって、あるべき自然状態に至り、完全さを手にするための選択として提示される。かくしてヘンリーとキャサリンの結婚は「男性的なイギリス」と「女性的なフランス」の象徴的な結婚を演出し、戦勝国による敗戦国併合の不協和音は、結婚のハーモニーの中にかき消されようとする。

Ⅳ

「イギリスとフランスの血を半分ずつ受け継いだ男子」の誕生の希望のもとに、芝居は幕を閉じる。しかしその後でコーラスが観客に告げるのは、それまで舞台上に再現してきたヘンリー / イギリスの輝かしい勝利が、束の間の出来事にすぎなかったという歴史の事実である。女王統治下の時代に、劇中のヘンリーと同じく「武勇の死者たちの記憶を蘇らせる」べく立ち上がったのは、ヘンリーの物語を舞台に再現しようとしたシェイクスピアの劇場でもあった。

CHORUS

Small time, but in that small most greatly lived
This star of England. Fortune made his sword
By which the world's best garden he achieved,
And of it left his son imperial lord.
Henry the Sixth, in infant bands crowned King
Of France and England, did this king succeed,
Whose state so many had the managing
That they lost France and made his England bleed,
Which oft our stage hath shown; and for their sake
In your fair minds let this acceptance take.　(Epilogue 5-14)

その後のイギリスの運命を観客に知らせるコーラスは、ヘンリーの息子が失った栄光について触れようとも、ヘンリーの妻がもたらした新たな繁栄について触れることはない—ヘンリーの死後、オーウェン・テューダーと再婚

したキャサリンは、エリザベス女王の父、ヘンリー8世の曾祖母となった人物である。キャサリンの未来への言及は、現在の君主エリザベスと過去の英雄ヘンリーとの連続性を観客に印象づけるものとなり得たに違いない。しかし劇にはヘンリーが戦って勝ち取り、妻としたキャサリンが登場するだけで、若くして未亡人となり、自らの意志で再婚して子孫をもうけた彼女のもう一つの側面が伝えられることはない。夫の死後、国王の母としてよりも再び女性として生きる道を選んだキャサリンの女性性は、男性による統制を離れ、過剰な主体性を発揮する「危険な」女性性に発展しかねないものであった。そしてそのような「危険な」女性性こそ、ヘンリーの息子の時代に、彼の築いたイギリスの栄光を打ち砕いたものに他ならない。英雄的君主に統べられた国家の一瞬の栄光を再現しようとする場からは、「純粋な」男性性による支配を脅かすような女性の記憶は拭い去られるべきなのかもしれない。

こうして劇の冒頭でサリカ法について述べるカンタベリーと、劇の最後で観客に向けて話すコーラスは、ある共通の役割を与えられることになる—イザベラの名を口にしなかったカンタベリー同様、コーラスはキャサリンの未来について語ろうとはしないのである。

註

1 主なものとしてPhyllis Rackin, *Stages of History: Shakespeare's English Chronicles* (Ithaca: Cornell UP, 1990) 166-8; Katherine Eggert, "Nostalgia and the Not Yet Late Queen: Refusing Female Rule in *Henry V*", *ELH* 61 (1994) 526-9; Alan Sinfield, *Faultlines: Cultural Materialism and the Politics of Dissident Reading* (Oxford: Clarendon Press, 1992) 129-30が挙げられる。

2 『ヘンリー5世』からの引用ならびに行数表示はすべて、William Shakespeare, *King Henry V*, ed. T.W.Craik (London: Routledge, 1995) による。

3 Eggert, 529.

4 ヘンリーが戦場で行う以下のスピーチからも分かるように、戦場にやってきた兵士たちの"manhood"と、本国に残ったイギリス男性たちのそれとの間には区別が設けられている。戦争中の「男性的なイギリス」というアイデンティティに係わるのは前者の男性たちのみである。

We few, we happy few, we band of brothers.

.....

And gentlemen in England now abed

Shall think themselves accursed they were not here,

And hold their manhoods cheap whiles any speaks

That fought with us upon Saint Chrispin's day.　　(4.3.60-7)

また、戦場にやって来ても戦わず盗みを働くピストルやニム、バードルフも「男性的なイギリス」に係わる範疇からは除外されている。バードルフとニムはイギリス軍自らによって処刑され、生き残ったピストルもウェールズ人のフルエリンに棍棒で打ち据えられ、イギリス人将校ガワーに、"let a Welsh correction teach you a good English condition"（5.1.78-9）と諌められる。ピストルの "condition" は外国人であるフルエリンのそれ以上にイギリスのアイデンティティにそぐわないものとして表現されている。

5 クォート版では、アジンコートの戦場場面でのフランス皇太子はブルボン公という別の貴族に差し替わっている。今回用いたアーデン版はこの箇所についてフォリオ版に基づき、戦場場面の人物を皇太子としている。「女性的なフランス」というステレオタイプを最も良く体現していると思われる戦場の人物が、皇太子なのか一貴族にすぎないのかということが、劇全体の解釈に微妙に影響を与えるという問題は残る。しかしいずれにせよフランス軍を率いる立場にある貴族が、自信過剰で浅薄な人物に描かれていることに注目すべきであろう。

6 Womersleyは「女々しいフランス」という国家のイメージは、『ヘンリー５世』が書かれた当時のイギリスに一般的に存在はしていたものの、文学におけるフランス表象は、当時の英仏間の政治的関係（主にカトリック信仰をめぐるフランス国内の対立と、それに介入したイギリスとの関係）を反映して、様々なものがあったことを検証している。David Womersley, "France in Shakespeare's *Henry V*", *Renaissance Studies* 9 (1995) 442-59 参照。

7 Sinfield, 131 参照。なお *O.E.D.* は "effeminate" が人間に対する形容になる場合の意味として、「女性的な」「男性らしくない」「気力の萎えた」「弱々しい」の他に、「放縦な」「享楽的な」「過度に洗練された」というものを挙げている。

8 『ロミオとジュリエット』からの引用ならびに行数表示は、William Shakespeare, *Romeo and Juliet*, ed. Brian Gibbons (London: Methuen, 1980) による。

9 『リチャード２世』からの引用ならびに行数表示は、William Shakespeare, *King Richard II*, ed. Peter Ure (London: Methuen, 1961) による。

10 Sinfieldは皇太子による挑発が、単に放埒時代を過ごしたヘンリーの人格に対する侮辱というだけでなく、より具体的にはヘンリーの "effeminacy" への攻撃であることを指摘

している。Sinfield, 132参照。

[11] 戦場での敗北の場面以降、戦闘に参加していた皇太子その他のフランスの貴族たちが登場する場面はなく、台詞はもちろん彼らに言及する記述も存在しない。

[12] Jean E. Howard and Phyllis Rackin, *Engendering a Nation: Feminist Account of Shakespeare's English Histories* (London: Routledge, 1997) 5.

[13] Howard and Rackin, 5; Karen Newman, *Fashioning Femininity and English Renaissance Drama* (Chicago: U of Chicago P, 1991) 101.

[14] Newman, 104.

[15] 『じゃじゃ馬ならし』からの引用ならびに行数表示は、William Shakespeare, *The Taming of the Shrew*, ed. Brian Morris (London: Methuen, 1981) による。

[16] Howard and Rackin, 192. Howard とRackinは「ケイト」と呼ばれる女性としてさらに『ヘンリー4世』に登場するホッツパーの妻を挙げ、既に "domesticate" された存在である彼女は「ケイト」以外の名前を与えられていない点を指摘している。

[17] Eggert, 539.